

いる団地のコミュニティを再生しようと活動を始められています。ここでは、住民が寄り合うための要素は生垣のようです。保存地区のように厳しい規制でなくても、住民の方々が自分たちの団地の誇りとして生垣をベースにした新しいまちづくりに取り組もうとされています。これらのように、まちづくりのゴールは、制度、非制度にかかわらず手段を目的化するのではなくて目的を手段化していくような、共感と自発性の下で次々と目的が生まれていくものだと思います。



上野団地

(当時 <http://urbansection.co.jp/project/12matuyamaueno/12matuyamaueno.html> より)

伊予市の双海町の人気スポットである下灘駅をご存知でしょうか。かつては単なる無人駅でした。日本一海に近い駅であり、夕日が沈むロケーションから、多くの鉄道ファンをはじめ一度は降りてみたい駅と言われる無人駅になりました。『男はつらいよ』のロケ地にもなり、フーテンの寅さんこと渥美清さんが寝転がったベンチもあります。

駅を降りたら、眼下にひろがる伊予灘の美しい海が広がっています。また、沈む夕日が立ち止まる町といわれるように、夕日の絶景スポットとしても広く知られています。今年で33回目となる夕焼けプラットホームコンサートが毎年行われていることでも知られています。結婚式も度々行われています。

先日、都市住宅学会中国四国支部の四国見学会で関係者の皆さんを下灘駅に案内しました。たま

たま観光列車「伊予灘ものがたり」が到着していたこともあり、たくさんの方がいて、写真を撮ったり、アテンダントの方々とお話をしたりしていました。ただの無人駅に、なぜこんなにたくさんの方がいるのか、論争になりました。無人駅だから、海がきれい、夕日が美しい、お花畑の癒やし、下灘珈琲の魅力など様々な意見が出ました。なにもない無人駅に、どんな魅力があるのでしょうか。

随分前に、駅で活動されているJR下灘駅ワールドミュージアム運営委員会でお話をさせていただいたことがあります。もう何を話したかも定かではないのですが、地元の皆さんの駅への強い思いを感じました。

駅に行くと、いつものことですが、ゴミが落ちていません。お花畑はいつも、いつも美しいです。また、トイレもとってもきれいです。老人会&ご近所の皆さん、下灘小学校の児童&先生方&保護者、双海中学校、日赤奉仕団、下灘珈琲、双海地区公民館、地域おこし協力隊の皆さんを巻き込むなど、多様な人たちが協働する事業になっています。

駅や目の前の島々やお花畑について地元の人がガイドし、訪れる人たちの要望に応じて写真を撮るなどホスピタリティあふれるボランティアの方々がおられることも魅力となっています。このように無人駅の魅力を自覚し、多くの人に楽しさや癒しや自分を振り返る場を提供し続けています。それは、目に見えない努力を日々重ねることから生まれます。海に近く、夕日が楽しめる下灘駅のロケーションは大きな魅力であると思います。この駅の魅力はそれだけでないと考えています。初めて駅を訪れる人たちには、地元の人たちの努力は目に見えていないはずですが、隅々まで手入れの行き届いた場の持つ力によって、とっても居心地のいい空間になっています。その価値に共感して、ルールが明示されていないのに、自然とごみを捨てない。無人駅と海と夕日という資源だけでなく、そこにある価値を守ろうとする自発